

# 臨床心理学における質的研究法についての一考察

## ～「セラピスト・インタビュー研究法」についての概要

八巻 秀 (駒澤大学文学部心理学科)

One consideration about the qualitative study method in the clinical psychology :  
The outline about "the therapist interview study method"

Shuu Yamaki (Department of Psychology, Faculty Letters, Komazawa University)

### はじめに： これまでの日本の臨床心理学研究について

これまでの日本における臨床心理学研究には、大きく2つの流れがあった。1つは「事例研究」であり、もう1つは「量的研究」である。

日本における現場レベルでの心理臨床研究、あるいは心理療法の研究では「事例研究」が重視されているというのが現状であり、これまでも数多くの事例研究が発表されてきている。事例研究とは、事例を担当したセラピストが、面接終了後にとった記録などをもとに、セラピスト自身に関心を持っている概念、または現象などについて考察したものである。例えば、フロイトによるアンナ・O や症例「ハンス」の論文など、広く時代を超えて読まれているものなどが、事例研究の始まりとも言えるだろう。しかしながら、現在発表されている多くの「事例研究」は、モデルや理論の提示にまで至っていない点で、事例研究とは言い切れず、単なる事例報告や事例検討でしかないという批判もある(下山, 1996)。そのような事例報告では、どのような基準に基づいてデータ収集・分析を行い、どのようにデータを選択しているのかということに関する情報が、明らかに不足している場合が多く、セラピストの経験による判断や臨場的直観のみに、心理臨床活動の知見が委ねられてしまっていることになる。

一方で、大学・大学院での卒業論文・修士論文の多くは、質問紙や尺度を用いた「量的研究」であるという事実がある。それは、卒業論文や修士論文を書く学生では、臨床事例を継続的に担当する能力が不足しており、当然のことながら事例研究ができない場合が多いということが大きな理由であろう。そのため、毎年量産される多くの論文が質問紙調査による研究であり、その意味では、これまでの臨床心理学研究は、量的研究が主流であったとも言えるだろう。

しかしながら未だに大学の心理学科では、カウンセラーを志望する学生が多く、そのような臨床心理学を学び

たいという学生が求めているのは、カウンセリングのような対人交流あるいは感情交流などに興味・関心が向いていることは確かである。それに対して、客観性を重視する量的研究では、そのような対人・感情交流について実感を持って調べるには、何かしらの物足りなさを学生が感じてしまうのも、仕方がないのかもしれない。

また「論文を書く」と臨床能力が落ちるなどという定説が存在しているように、研究論文を書くという作業が心理臨床能力を向上させるということには必ずしも繋がっていない、むしろ別のものであるという考えも、臨床心理士養成に携わる多くの教員の見解ではないだろうか。はたして、臨床能力も伸ばすことができる研究というものはあるのだろうか。これはこれまで問われて続けている臨床心理学研究の課題の1つでもあった。そのような問いの中で、近年注目されてきたのが、質的研究法である。では、次にその質的研究について述べてみたい。

### 臨床心理学における質的研究

事例研究や量的研究でカバーできない領域を補うものとして、近年、臨床心理学においても「質的研究」が注目されている。質的研究法の種類は多く、グラウンデッドセオリー法をはじめとして、ナラティブ研究、現象学的アプローチ、参与型アクションリサーチ、エスノグラフィ、ディスコース分析、会話分析など、様々な質的研究法が開発されてきている。

臨床心理学研究において、質的研究が注目されてきた理由は、いくつか考えられるが、1つは、臨床心理学も質的研究も「個人の視点を重視」という共通する基本思想があるからだと言えよう。その個人の視点を重視する方法として、当事者へのインタビューという実践は、質的研究においても基盤をなしていると言えるし、心理臨床の実践もインタビューが規範であると言える(森岡, 2009)。

また、もう1つの理由としてあげられるのが、「心理臨床における社会構成主義の広がり」である(鬼塚ら, 2009)。

1980 年代、特に家族療法の世界において、「ポスト・モダン」の動きである「ナラティブ・セラピー」が広がっていったが、それが看護、福祉など他の領域にも広がっていき、同時にその背景思想である「社会構成主義 (social constructionism)」が注目されるようになっていった。社会構成主義とは、客観的現実を決して知り得ないものであり、現実には常に言葉によって作り出されると考える認識論である (Gergen, 1985)。

社会心理学者の杉万ら (1999) は、臨床心理学と社会構成主義との関係について、以下のように述べている。

臨床心理学の現場は、決して、クライアントが抱える客観的問題を発見・治療する場ではありえない。それは、臨床家・クライアント・関係者が、言語的協働作業を通じて、クライアントにとっての新たな現実を社会的に構成していく場であるはずだ。そのような場においては、臨床家の目に映る確かな事実でさえも、臨床家コミュニティーや、より広範な文化コミュニティーが展開してきた社会構成の産物であることに、臨床家は自覚的でなければならないだろう。

さらに現在では、家族療法に限らず、心理臨床全般にわたって、社会構成主義の考え方が有効であることを、様々な臨床心理学者も言い始めたのである。この社会構成主義の考え方の影響は、臨床心理学研究にも及び、論理実証主義に批判的な社会構成主義が、臨床心理学における質的研究の発展に寄与した部分は大きいと考えられる (下山, 2010)。

では、このように注目されつつある臨床心理学的質的研究は、どのようなことを目的としているのであろうか。次に述べてみたい。

### 臨床心理学における質的研究の目的

臨床心理学における質的研究の目的として、McLeod (1999) は、それを以下の 3 つに分けて説明している。

- ① ある特定の人たちの体験を明らかにする研究 : 心理障害に悩む人たちへの調査や、現場で活躍する臨床家へのインタビューを行い、臨床の現状を知る
- ② ある現象に関する研究 : 理論では明確になりきらない臨床場面での現象 (転移、洞察など) を調査・検討・理解する
- ③ 反省的な研究 : 臨床心理学の研究者が、自らの人間観・世界観・援助活動の在り方やその変化自体などを振り返り、その歴史的・文化的意味について検討する

このように、臨床心理学的質的研究の目的もいろいろ

考えられるが、上記の中では③の研究は、まだ数は少なく、これから研究が進んでいくであろうと思われるが、①や②の研究は、これまでも数多く発表されつつある。その中で、本論文では、特に上記の①の研究法の 1 つの形である「セラピスト・インタビュー研究」について取り上げ、次にその概要について述べてみたい。

### セラピストの視点からの研究について

臨床心理学的な質的研究法の 1 つとして、セラピストの視点から心理臨床のプロセスを理解していこうとする質的研究法が「セラピスト・インタビュー研究法」である。セラピスト (=心理臨床家) が、臨床場面で「どのようなことを考えているか」「どのようなことを重要であると捉えているか」あるいは「どのように見立てを行い、介入計画や方策を立てていくのか」など、セラピストがどんなことを考えて臨床を行っているのかを探っていく研究は、臨床心理学研究にとって、非常に興味深い「問い」「テーマ」である。特に臨床心理学の勉強を始めた初学者にとって、現場で活躍するセラピストの話を聞くということは、臨床の実際の姿や知見を知る・学ぶ上で貴重な情報源となり、それはセラピストに対する自由記述の質問紙調査やインタビュー調査という作業によって収集可能である。

このように、セラピストにインタビューを行って情報収集するという研究方法は、実際のクライアントから何らかの調査・面接などで情報を集める研究と比較して、データ収集という点から考えても最も実行しやすく、倫理的な意味でもクライアントへの影響という問題も心配がないという点で、初学者のための臨床心理学研究に留まらず、一般的な臨床心理学研究の方法論の 1 つとして適切なものであると言えるだろう。

では、次にこのセラピスト・インタビュー研究法は、実際どのように行われていくのかを述べてみたい。

### セラピスト・インタビュー研究法の手続き

岩壁 (2010) が示した「インタビュー調査研究の流れ」を元に、以下にセラピスト・インタビュー研究の手続きの概略を述べてみる。

#### ■ 準備段階

- ① インタビュー・ガイドの作成 : リサーチクエスションに沿ったセラピストへの質問項目を整理する。
- ② パイロットインタビューの実施と振り返り : リサーチ・メンバーなどに実施。録音分析などして質問項目などをさらに洗練させる。

## まとめとして：セラピスト・インタビュー研究法の意義と可能性

ここまで、臨床心理学研究において質的研究がなぜ注目されてきたのか、そして、臨床心理学的質的研究法の1つとして、「セラピスト・インタビュー研究法」についてその概要を説明してきたが、最後にあらためてこのセラピスト・インタビュー研究法の意義と可能性について、いくつか述べてみたい。

まず、この研究法が、心理臨床活動を通してセラピストが得た知見を、事例研究のようにセラピスト本人が考察して示すのではなく、第三者が理解・検討・分析・整理するものであるという点があげられる。これまでセラピストとクライアントしか知らない密室で行われる心理臨床の営みを、臨床心理学研究の俎上に客観的に乗せる有効な手段の1つとして考えられる。

もう1つは、初学者が取り組める入門的な質的研究法としてあげられるのではないと思われる。インタビューに応じてくれるセラピストさえ見つければ、インタビューの実施は可能であり、先述したように、クライアントへのインタビューに比べて倫理的にも安全性は高いと言えるからである。

また、分析方法が合議制質的研究法を採用している点も大きいと思われる。数名のメンバーによる合議制の質的分析体験が、多声性や間主観性という観点からも、臨床的な体験として重要であると言えよう。これは、これまで、つながりの悪かった研究と心理臨床の実践とをつなげるものとして、合議分析が事例検討やグループ・スーパーヴィジョンと類似している点からも、研究者だけでなく、セラピストにとっても役立つ研究になっていると考えられる。

さらに、駆け出しのセラピストでもある大学院生が、現場で活躍しているセラピストにインタビューすることを通して、「実際の臨床を学ぶ」ことができるというメリットもあげられるだろう。その点では、セラピスト・インタビューは新たな臨床家のトレーニング法としても有効なのではないだろうか。このように、心理臨床家を目指す初心者にとっては、セラピストへのインタビュー調査経験は、研究のみにとどまらない、実践的な心理臨床トレーニングにもなりうるという可能性もあると考えられるだろう。

以上、セラピスト・インタビュー研究法の意義と可能性について述べてきた。

駒澤大学大学院の八巻ゼミでは、このセラピスト・インタビュー研究が1つの伝統(?)になりつつあり、現

③ インタビュー・ガイドの見直し：再び質問項目を整理する。

④ 再パイロットインタビューの実施（2名以上）：

③で整理・修正した部分をチェックする。

### ■ 本調査実施

① データ収集段階：セラピストへのインタビューの実施し、トランスクリプトを作成する。

② データ分析：リサーチチームの合議による質的分析を行う「合議制質的研究法」を実施する。

③ インタビュー・ガイドの見直し：さらなる質問項目の再整理を行う。

④ 次のインタビューへ（同じプロセスの繰り返し）

以上が、セラピスト・インタビュー研究の手続きであるが、この研究法の中で取り上げておきたいポイントの1つとして、その分析方法がある。セラピスト・インタビュー研究では、すべてインタビューの逐語をおこし、その逐語録について質的分析を行っているが、その分析法として「合議制質的分析法 (Consensual Qualitative Research: CQR; Hill et al., 1997)」が採用されることが多い。この方法は、数名のメンバーから構成されるリサーチチームを作り、すべての分析段階においてメンバー同士の話し合いによって、最終的な概念名などを決定していく（合議していく）やり方である。また、分析途中で、研究に加わらない専門家による監査 (audit) を受けることにより、より客観性を保つこともできる。

CQR の利点として主にあげられているのは、以下の3つである。

- ① 質的分析が1人の研究者の見方に偏らない
- ② データ分析のプロセスが効率化できる
- ③ チームメンバーが意見交換することで、臨床知見を深める学習機会になる

質的分析になれていない初学者でも、メンバー同士の様々なものの見方・考え方を聞きながら、「合意」を目指して考えることができるという点は、数値で表す妥当性や信頼性とは異なる「質」についての検討の仕方であると言える。ある意味で、ナラティブ・アプローチで言われている「多声性」の体験 (野村, 2010)、あるいは精神分析における「間主観性」の体験 (Stolorow, 1987) にもなっているのではないと思われる。また、このようなグループでの作業は、ケースに関する事例検討会やグループ・スーパーヴィジョンの作業とそっくりであり、その点でも臨床的にもかなり役立つ研究作業であるとも考えられる。

在までのところ、4名の大学院生がこの研究法を採用して学会発表や論文発表をしている。それぞれの学生が選んだテーマ設定は、「初回面接における見立て」(鬼塚, 2010)、「成功体験」(吉田, 2010)、「停滞感」(山崎, 2011)、「勇気づけ」(廣瀬, 2011)などと多様である。そして、本号の駒澤大学心理臨床研究には、この中で、「見立て」と「成功体験」についてのセラピスト・インタビュー研究論文が掲載されている。具体的なセラピスト・インタビュー研究の実施方法や分析結果、考察などはそちらを参照して頂きたい。

当然のことながら、心理臨床家であるセラピストは、面接の専門家であり、それゆえ自らの体験を言葉にする能力に長けていると考えられる。そのため、そのセラピスト自身の体験を研究対象にしてデータを集めるには、インタビューという手段で行うのが、最も適切な方法であると考えられる。セラピストにインタビューを行うということは、以上述べてきたように、単なる研究におけるデータ収集という範囲を超えて、我々心理臨床実践の研究者あるいは心理臨床家にとっても貴重な学習体験になりうるのではないだろうか。

## 付記

本論文の一部は、日本質的心理学会第7回大会(茨城大学)で発表されたものである。

## 参考文献

Gergen, K. (1985). The social constructionist movement in modern psychology. *American Psychologist*, 40, 266-275.

Hill, C., E., Thompson, B. J., & Williams, E. N. (1997). A guide to conducting consensual qualitative research. *The Counseling Psychologist*, 25, 517-572.

廣瀬弘文(2011). 心理面接における勇気づけのことば: セラピスト・インタビューを通して. 平成22年度駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻臨床心理学コース修士論文.

岩壁 茂(2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究. 岩崎学術出版社.

野村直樹(2010). ナラティブ・時間・コミュニケーション. 遠見書房.

McLeod, J. (1999). *Qualitative research in counseling and psychotherapy*. London: Stage.

森岡正芳(2009). 対話空間を作る: インタビュー実践としてのセラピー. 質的心理学フォーラム. Vol. 1. 39-48.

鬼塚 愛(2010). 初回面接における見立てに関する研究: セラピストへのインタビューを通して. 平成21年度駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻臨床心理学コース修士論文.

鬼塚 愛・吉田卓矢(2009). 社会構成主義が臨床心理学に及ぼした影響. 駒澤心理, 16, 21-29.

下山晴彦(1996). 心理学における実践型研究の意義—臨床心理学研究の可能性をめぐって. 心理学評論, 39(3), 315-337.

下山晴彦(2009). よくわかる臨床心理学. ミネルヴァ書房.

杉万俊夫・深尾 誠(1999). 実証から実践へ—ガーゲンの社会心理学. ナラティブ・セラピーの世界(小森康永ら編), 55-74, 日本評論社.

Stolorow, R., D., & Brandchaft, B., & Atwood, G., E. (1987). Psychoanalytic treatment: An intersubjective approach. *The Analytic Press, New Jersey*.

(丸田俊彦訳(1995). 間主観的アプローチ: コフトの自己心理学を超えて. 岩崎学術出版社)

山崎朱乃(2011). 心理面接における停滞への対処: セラピストの視点からのプロセス研究. 平成22年度駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻臨床心理学コース修士論文.

吉田卓矢(2010). 心理面接での成功体験に関するプロセス研究: セラピストの視点から. 平成21年度駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻臨床心理学コース修士論文.